原告団

第三十八号

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

忘れ得ぬ日

自分が、人間として生きてゆくために欠くことのできない機能の七〇%から八〇%ほどをもぎとられるという、思いも寄らぬ大事件にまきこまれたとき、鉱山学校出の採炭工・平野友幸さんはまだ三十二という若さだった。

昭和六年八月十五日生まれで、その翌年の十二月十四日に生まれた一つ違いの妻の広子さんが、三十一歳だった。

そのとき、友幸さん夫婦には三人の子どもがあった。長女の厚子さんが六つで小学一年生（昭和三十二年二月三日生まれ）。次女の礼子さんが四つ（同三十四年八月十八日生まれ）。末っ子娘の春美ちゃんにいたってはまだ、生後一年三カ月（同三十七年八月十日生まれ）の赤ん坊に過ぎなかった。

二人が結ばれたのは、昭和三十一年一月二十六日。三池大闘争の四年まえのこと。

広子さんは、そのころまだ実の父母をはじめとする大家族のなかでもみくちゃにされながら、市内の宮原町の家で暮らしていた友幸さんのもとへ、同じ大牟田市内の一商家から嫁してきた。

大牟田市新港町六番地三川鉱社宅十八棟の現住所へ移り住んだのは、大事件発生の年の二月の某日のこと。その日に先だつ、九カ月ほどまえであった。

茫然自失

大事件というのは、ほかでもなく三川鉱大爆発のことである。

「ご主人があがってきなはったから、早くきてください」

三井大領病院から電話連絡を受けたのは、爆発発生時刻から一昼夜以上もたった、翌十日の午後六時過ぎのことだったという。

一瞬のうちに地獄と化してしまった真っ暗な三川鉱の坑底から、夫の友幸さんが生きてかえってきてくれることをほとんどあきらめていたときだっただけに、広子さんのうれしさはかくべつだった。

赤ん坊だった春美ちゃんを背なかにくくりつげると、広子さんは自転車にうち股がり、宙を舞う思いでわが家を飛び出した。泣きわめきながら自分のあとを追いすがる長女の厚子さんと、次女の礼子さんをふりきって……。

友幸さんは、意外にも天領病院の小児科病棟の二階に担ぎこまれることを知ってかけつけた実父の友喜さんら屈強な男たちの手でぐいぐいおさえつけられながら、七転八倒していたのだった。

場所は、冷たくて固いコンクリートのうえ。そのなかのだれかがついうっかりおさえつけている手をゆるめでもすれば、彼はそのほかの人の手をもふりはなしてはあばれた。

注射どころの話ではなかった。かんじんの医師も辟易して、寄りつくことができなかった。

そこへかけつけてきた広子さんそんな夫の姿をひと目見たとたんぼう然自失。その場にくずれるように座りこんでしまった。

つい昨日のこと、いつもとまったく変ることなく、元気に家を出かけていったあの夫が、まさかこんなにも変わっていようとは、思いも寄らなかったのである。

友幸さんは、見るとまだあの作業着姿のままだった。片方の脚には、地下足袋さえはいていた。

顔も、煤と泥とで汚れたままだった。汚れたその顔を真っ赤にしながら、彼は、自分の体をおさえつけている屈強な手をふりほどこうと、体を波うたせながらもがいていた。そしてわめいた。

「ちきしょう。頭ばどげんかしてくれっ。俺の体は、どげんかなってしまいよるっ」

今から思えばそのときの彼は、あの恐ろしい一酸化炭素の猛毒が中枢神経をはじめとする内臓諸器管を食い荒しているさいちゅうだったのだ。

悲劇の開始

医師が、いくら沈静剤の注射をうっても、さっぱり効き目はなかった。

一般の者の知るよしもなかったが、医師は一つの薬を、こんどは友幸さんの肛門から挿入した。

「うっかりすると、このまいってしまうがもわからないので、十分注意していただくように」——そう医師は告げて、その場を立ち去っていったが……。

さいわいものの三十分もたつと友幸さんはやっと静かになり、初めて眠りにはいっていった。

そのままあの世にいってしまうところか、眠りは長くはつづかなかった。目を覚ましたかと思うと彼はいきなりコンクリート廊下のうえに飛び起きた。

「俺は仕事はせんなん。こげんしちゃおれんとぞ。どけっ」

わめくやいなや、さっとその場を飛び出していった。

あわてて追いすがる広子さんの力など、ものの数ではなかった。彼は下へ通ずる階段を、それもいっぺんにすっ飛ぶいきおいで、ひと足で三段も四段も飛び越えながら、風のように一階目がけてかけおりていった。

さいわい友幸さんは、みんなの手でもとの場所につれもどされたが、広子さんの実母のとしえさんがかけつけてきてくれたのは、そんなときだったのである。

「おかあさん、いっそのこと死んであがってこらした方がよかったよ。こんなにも苦しむとうちゃんを見ているのが、私はもうたまらんとよ」

広子さんは、実母としえさんの袖に顔を埋めながら声をあげて泣きくずれた。こうして平野友幸さんの、CO患者としての非情な生きざまはスタートしたのだった。

今、あのとき六つだった厚子さんが十七歳で高校三年生。四つだった礼子さんが、十五歳で中学三年生。わずか生後一年三カ月の赤ん坊だった春美ちゃんが早や十二歳で小学六年生になった。

それに、あのときまだ三十一歳れかけたことがあるんですけど、家庭のさびしさをまぎらわすために、バスケットボールの選手をしてがんばりました」

「その割には、横にばかり太って、上には伸びんやったねーエ」

男性としては完全に廃人にされてしまった悲劇のうえに、なお幾重にも積み重ねられた非情なこれらの症状。それでも、妻の広子さんが手を取るようにして、大小便の仕方から再教育しなければならなかった初めのころをふり返ればよくもここまで回復したものだ。

その彼に、今政府から法によって給与されている補償はといえば月に労災保険からの給付が四万千二百六十三円（三カ月で十二万四千七百八十九円）と、厚生年金の五万五千二十五円（三カ月で十六万五千二百七十四円）。合計九万六千二百八十八円也。

妻の広子さんが、市内の某食堂にパートで働いても、暮らしはきびしい。

翼広げて

ついこのころのこと非情な運命に耐えながら生きるこの一家のもとに、思いがけないよろこびが大きな翼を広げて舞いこんできた。長女厚子さんが生まれて初めて描いたという油絵が、〝第十八回筑後地区美術高校展覧会〟に、勉強中の高校からたった一人（出展は六人）だけ入選、奨励賞を受彰したことがそれである。

「娘から、病院に電話で知らせてきたときは、とてもうれしかったですね」と、ぽつりぽつりいいながら、友幸さんは目がしらを赤くする。そこはやっぱり、父親なんだな。

次の外泊日には、留守をまもる家族たちがまだ眠っている早暁いそいそと帰ってきては、長女厚子さんをせき立てながら、つれだって久留米の展示会場に見にいったという彼。よほどうれしかったのに違いない。

でもこの分だけは決して、長期療養中のCO患者・平野友幸さんをとらえて離さぬ、あの幻覚ではなかった。

たずねた夜、外泊で帰つてきた友幸さんを迎えた一家は、いつしよにすき焼を楽しんだ。せめてものだんらんだつた。いつもは、どこかおどおどするふうの友幸さんの表情も、この夜はゆるんで見えた。

幻覚がささえる、命

——悲劇の爪跡は、子どもの心にも深く

いっぺんに消え去った輝く希望

CO患者・平野さんの実態

導く幻覚

幸というべきか、不幸というべきか。平野友幸さんは長期療養中のCO患者だ。

大牟田労災療養所（大河内五郎所長）に今も入院、加療中の身。

三井天領病院—九州大学医学部付属病院を経て、昭和四十一年の四月二十二日からここへ。

彼は今、一日一日と積み重ねられてゆく時間と、あの日以来ずたずたにきり裂かれてしまった思惟力をつづり合わせ、そこからひょいひょいと飛び出してくる願望とを奇妙に融合させながら、自からつくり出してゆく幻覚にささえられ、生きている。

彼は、もともとオートバイの免許などをとった経験はない。だが彼は頑として主張する——「俺は以前は、単車の免許もとってバリバリ乗りまわしよった」と。

また彼は、妻の広子さんや子どもたちにその記憶がないのに断固として宣言する——「九大付属病院入院中に、これたちが見舞いにきてくれたときなんか、わざわざ帰りの電車の始発駅まで送っていって、席をとってやりよった」、とも。

一面もの忘れのひどい彼は、他面ではこうして自からつくり出してゆく幻覚にささえられ、生きつづけている彼である。

男性としては完全に廃人にされてしまった悲劇のうえに、なお幾重にも積み重ねられた非情なこれらの症状。それでも、妻の広子さんが手を取るようにして、大小便の仕方から再教育しなければならなかった初めのころをふり返ればよくもここまで回復したものだ。

その彼に、今政府から法によって給与されている補償はといえば月に労災保険からの給付が四万千二百六十三円（三カ月で十二万四千七百八十九円）と、厚生年金の五万五千二十五円（三カ月で十六万五千二百七十四円）。合計九万六千二百八十八円也。

妻の広子さんが、市内の某食堂にパートで働いても、暮らしはきびしい。

翼広げて

ついこのころのこと非情な運命に耐えながら生きるこの一家のもとに、思いがけないよろこびが大きな翼を広げて舞いこんできた。長女厚子さんが生まれて初めて描いたという油絵が、〝第十八回筑後地区美術高校展覧会〟に、勉強中の高校からたった一人（出展は六人）だけ入選、奨励賞を受彰したことがそれである。

「娘から、病院に電話で知らせてきたときは、とてもうれしかったですね」と、ぽつりぽつりいいながら、友幸さんは目がしらを赤くする。そこはやっぱり、父親なんだな。

次の外泊日には、留守をまもる家族たちがまだ眠っている早暁いそいそと帰ってきては、長女厚子さんをせき立てながら、つれだって久留米の展示会場に見にいったという彼。よほどうれしかったのに違いない。

でもこの分だけは決して、長期療養中のCO患者・平野友幸さんをとらえて離さぬ、あの幻覚ではなかった。

爪跡は深く

どうしたわけか三人の子どもたちは、無類の明るさにはちきれそうな日々をおくり迎えている。それでも、彼女たちの心のなかにさえ深く刻みつけた悲劇の爪跡を、どうかくすことができよう。

母親に似たか、背丈はそれほどでもないのに、人一倍太っちょの長女厚子さんはいう。

「中学のころ、やっぱりひねぐ

三人の子どもこそいたが、人生